

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『新釈諸国噺』をめぐって：太宰治における古典回帰
Author(s)	キアラ コマストリ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集，26期：1 - 7
Issue Date	2011-11-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038800
Right	
Relation	



『新釈諸国噺』をめぐって～太宰治における古典回帰～

キアラ・コマストリ

ずっと以前から、日本の文学に興味を持っており、「日本に行ったら、なるべくたくさん
の文学作品を読んでいつかその研究をしたい」と心に決めていた。最初のうちは古典を好
み、奈良時代・平安時代の名作の翻訳をいくつか読んでいた。

そして、昨年来日してからは、やはり原文に挑戦したくなり、翻訳でしか読んでいなか
った作品を日本語で読んでみた。しかし、予想していた以上に難しく、やめた方がいいの
だろうかと迷ったこともあった。そこで、文学部の授業を聴講させてもらったところ、現
代作家の太宰治に出会えた。そして、図書目録を調べると、『御伽草紙』という書名に目を
引かれ、元々江戸時代にも興味を持っていたので、好奇心に駆られ、読んでみた。

『御伽草紙』と同じ本に収められている『新釈諸国噺』は、井原西鶴の原作を基に、そ
れらの話をアレンジした斬新な選集である。現代作家の太宰治を通して見た西鶴は大変面
白く、やはり原作にも興味を覚えた。特に西鶴と太宰との違いが気になり、それを研究テ
ーマにすることにした。

太宰治と井原西鶴

太宰治は20世紀のデカダンス派の小説家であり、井原西鶴は江戸時代の浮世草子、人形
浄瑠璃作者、俳人である。このような二人の距離を考えると、どうしても好奇心がわいて
くる。

太宰がどういう人物だったかももう少し詳しく紹介しておこう。太宰は、昭和時代の小
説家であり、坂口安吾、石川淳などともに、「無頼派」の作家と称された。無頼派という
のは、敗戦直後に活躍した、一般的なモラルに抵抗する反逆精神のきわめて強い作家たちを
指す。という、太宰治が暗い話ばかりを書いているのかと思われがちであるが、実際
には素材も多岐に渡り、さまざまな作風を見せている。たとえば、『新釈諸国噺』には、戦時
下の日本の状況に対するすどい諷刺や皮肉が含まれており、ギャグのセンスがあること
は否定できない。

このようなギャグや皮肉のセンスにこそ、井原西鶴との共通点が見られる。

『新釈諸国噺』について

単行本『新釈諸国噺』は、昭和20年1月に刊行される。太宰治が西鶴の作品をもとにし
て書いた小説である。

太宰は、「私は西鶴の全著作の中から、私の気に入りの小品を二十編ほど選んで、それにまつわる私の空想を自由に書き綴り、『新釈諸国噺』という題で一本にまとめて上梓しようと計画している」と言っているが、内容的に、そして文章の構造の面から見ても原作から遠く離れており、西鶴の現代訳とはまったく言えない。太宰自身の言葉を引用していくと、「わたくしのさいかく、とでも振仮名を附けたい気持ちで、新釈諸国噺と言う題にしたのであるが、これが西鶴の現代訳というようなものでは決してない。古文の現代訳なんて、およそ、意味の無いものである。作家の為すべき業ではない」と言う。太宰は、西鶴の作品を背景とし、そこに自己の自由な「空想」を対比させ、自分の文学の本質にあるものを表現したのである。したがって、「太宰の西鶴」のなかに西鶴そのものを求めようとすることは、およそ意味のないことである。また、オリジナルから離れた部分についても、すべて太宰が自分自身で創造し、新しい素材を作り出したわけでもない。太宰は執筆に際して西鶴の他の作品や資料もかなり参照している。

たとえば、「裸川」という短編は、『武家義理物語』の「我物ゆゑに裸川」の翻案でありながら、実は『太平記』のエピソードを取り込んでいる。

さて、太宰が西鶴のいろんな作品からインスピレーションを得て、『新釈諸国噺』を書いているのは明らかだが、疑問を抱かずにはいられないのは、いったいどうして太宰治が井原西鶴を選んだのかである。

太宰自身の言葉を引用すると、「西鶴は、世界で一ばん偉い作家である。メリメ、モオパッサンの諸秀才も遠く及ばぬ」とあって、太宰が西鶴をひじょうに評価し、憧れていたことはいまでもない。実際、二人の作家を比べてみると、共通点がいくつか見られる。先行研究で指摘されているように、西鶴も、太宰のような反逆の精神を持っており、当時の古典的作法、秩序を破った作家であった。西鶴の作品をこのような形で引用したのは、おそらく太宰が、いわゆる“パロディの精神”に溢れた作品の中に、自己を流露させる余裕を発見したためであろう。また、腐り切った社会への批判、階級闘争、そして社会的地位の逆転などが、太宰にも、西鶴にも見られる。しかし、こう言ったテーマが共通しているとはいえ、それが実際二人の文学のメインテーマになっているとまでは言えない。

井原西鶴と言えば、『好色一代男』などという好色物をテーマにした作品がもっとも有名であり、それらが武家物や町人物をテーマにした作品よりずっと優れていると考えられている。そこで、もう一つの疑問が浮かんでくる。どうして太宰はもっとも評価される好色物ではなく、それに劣ると見られている武家物や町人物の作品を選んだのであろうか。太宰は西鶴の好色物をあまり好まなかったようで、「そんなにいいものだと思えない」とさえ述べている。しかし評価の問題は別として、おそらく好色物においては、太宰が自分の本心、自分の文学の本質にあるものを表す余裕を見つけれなかったのかもしれない。

『新釈諸国噺』の凡例では、この作品を通して、読者に「日本の作家精神の伝統」を知ってもらいたいと太宰は主張する。実は、この発言は戦時下のものであり、この時期以外に太宰が西鶴に傾倒したことはない。少なくともこの『新釈諸国噺』の時期には、太宰は

西鶴を高く評価し、日本の古典、伝統として受け継がれるべきものと意識していたことは明らかである。そこで、この日本の作家精神の伝統は、とくに西鶴の武家物や町人物の中にあると判断し、それを見出そうとしたのであろう。西鶴のもっとも有名で代表的な作品ではないからこそ、それを素材にして自由に自分の世界を創造し、表現できたのかもしれない。(確かに西鶴の作品を素材としたと言っても、それは決して西鶴の現代訳ではないし、西鶴解釈というものでもない。)

太宰によって新しくアレンジされた作品は12あり、タイトルもオリジナルから少しずれている。しかし、話の舞台となった江戸時代の日本の旧地名は、厳密に守られている。

順序は以下の通りである：

貧の意地 (江戸) 諸国はなし、巻一の三、大晦日 (おほつごもり) はあはぬ算用
大力 (讃岐) 本朝二十不孝、巻五の三、無用の力自慢
猿塚 (筑前) 懐硯、巻四の四、人真似は猿の行水
人魚の海 (蝦夷) 武家伝来記、巻二の四、命とらるる人魚の海
破産 (美作) 日本永代蔵、巻五の五、三匁五分 曙のかね
裸川 (相模) 武家義理物語、巻一の一、我が物ゆゑに裸川
義理 (摂津) 武家義理物語、巻一の五、死なば同じ浪枕とや
女賊 (陸前) 新可笑記、巻五の四、腹からの女追剥 (をんなおひはぎ)
赤い太鼓 (京) 本朝桜陰比事、巻一の四、太鼓の中は知らぬが因果
粹人 (浪花) 胸算用、巻二の二、訛言も只是聞かぬ宿
遊興戒 (江戸) 置土産、巻二の二、人には棒振虫同前に思はれ
・吉野山 (大和) 万の文反古、巻五の四、桜の吉野山難儀の冬

「裸川」

昭和二十九年一月発表。

出典は『武家義理物語』巻一ノ一「我が物ゆゑに裸川」。

全文の要約：川の真ん中で数枚の銭を落とした青砥左衛門藤綱は、大金を与えて人足を呼び集め、彼らを川へ入らせて落とした銭を探させる。川の水は冷たく、夜だったので作業は難航したが、ある男(浅田)が一人ですべての銭を見つけ出した。(略) 褒美の金で宴会が開かれ、その席でこの男は自分が腹掛けから銭を出して青砥を騙してやったと打ち明け、仲間の喝采を得るが、これを聞いていた座の一人(小さい男)が、青砥の志を台なしにするものだ、と批難して席を立った。やがて、騙されたことを知った青砥は再び男を呼び出し、一人で銭を全て見つけるよう命じる。厳しい見張りをつけられ、丸裸で川を掘り返さ

せられたあげく、男は九十七日目に漸く銭を全て探し出した。

登場人物：

(我が物ゆゑに裸川)	(裸川)
青砥左衛門尉藤綱 (あおとさえものじょうふじつな) →	青砥左衛門尉藤綱
人足の一人 →	浅田 (あさだ)
千葉孫九郎 (ちばまごくろう) →	小男

登場人物の役割分担を見てみると、原典ではテーマに関わる重要な役割を果たす千葉孫九郎が、「裸川」にあつては名前も与えられていない「小男」に後退させられている。逆に、「我が物ゆゑに裸川」の「人足の一人」という人物に、「浅田」という固有名詞が作者太宰によって与えられ、「裸川」では、ひじょうに重要な役割を果たしている。浅田は主要な人物であり、彼と青砥左衛門は対照的な存在となっていることを理解すべきであろう。

『新釈諸国噺』について指摘されているように¹、「裸川」の世界を支えているのはまさに青砥と浅田だとさえ言える。西鶴の「我が物ゆゑに裸川」では、青砥が支配者のような役割を果たし、武士の倫理を表す。それに対し、青砥を騙した男（それに青砥に奴隷扱いをされた川底を探った男たち）は被支配者であり、庶民の身分を表す。このような「支配者対被支配者」という構図は、太宰の「裸川」にもそのまま見られるが、二人の対立は強調され、絶対化される。また太宰が、原作ではあまり印象に残らず、存在感があまりないとさえ言える青砥の人間像を徹底的に戯画化している。「裸川」のエピソードで最初の青砥の紹介には「質素儉約、清廉潔白」という説明があるが、実際それは青砥のゆがんだ人間性を暴いているだけであり、青砥の人生哲学は、もはやアイロニーの対象でしかない。

具体的に例を挙げると、青砥は川に十一文を落としてしまった時は「惜しい、いかにも惜しい、十一文といえども国土の重宝（略）もったいなし、おそろべし、とてもこのままここを立ち去るわけにはいかぬ」と言い、また「十一文は川の水に押し流され、所在不分明となって国土の重宝を永遠に失うというおそろしい結果になるかもしれぬ」と言う。ここには太宰によるアイロニーと青砥への否定的な評価が明らかにかがえる。太宰の批判には、もう少し深い意味がある。それは、確かに青砥は国のために質素儉約を心がける真面目な人間ではあるが、その理念と現実の行動の間には矛盾があるというところに見られる。例えば、そのまま十一文を川の底に残すのはもったいなしと言いつつ、そのお金を探し出す人を集めるために、最初に落としたお金の二倍のお金を使ってしまう。また、「国のため」と言っているが、この「質素儉約」の理念を絶対化し、わずかに十一文のために、国の宝と言える民衆を虐げる。しかも、青砥は、自分が加害者であることにはまったく無

¹ 小泉浩一郎（『新釈諸国噺』論—「大力」「裸川」「義理」をめぐる—）

自覚である。逆に、原作では悪役になる男（浅田）は、「裸川」において、お金を自分の腹掛けから出すことで、いつまでも続く可能性のあったこの残酷な作業を打ち切らせ、結果的に仲間を助けたことになる。そもそも青砥と浅田は、それぞれ「武士」と「庶民」という対立する社会的身分を代表し、この場合は庶民が反感を持ち、武士に対抗するという構図になっている。また、浅田の傲慢な発言は、「我が物ゆゑに裸川」ではただ知恵が働くのを見せたにすぎないが、「裸川」では、容赦しない支配者への反感と民衆を救い出そうとする侠気の発露として造形されている。

しかし、興味深いことに、「裸川」における浅田の紹介を見てみると、「人足の中に浅田小五郎という三十四、五歳のぼくち打ちがいた。(略)…傲岸不遜にして長上をあなどり、仕事をなまけ、(略)大馬鹿者の一人であった」とあり、非常に矛盾するところがあるように感じられる。おそらく太宰が登場人物の描写を誇張することで、読者の関心をつかもう、楽しませようとしたのだろう。

また、一見太宰が描く浅田のイメージはマイナスの意味を与えられているが、実際は、両者を平等に見ておらず、太宰の共感は明らかに浅田の方にある。そして、太宰が浅田の権威に屈しない抵抗精神に憧れ、最後に真相が暴かれ、罰が下された時も、浅田という人物を見捨てることなく支えているのである。西鶴の原典では、正道を歩む善人と、正道から外れた悪人が並んで登場するというセッティングに最初からなっている。原作においてももっとも焦点が当てられているのは、社会的身分の対立や支配者への抵抗などではなく、正道と非道の対照である。

西鶴の「我が物ゆゑに裸川」においては、青砥を欺いた男がうっかり口を滑らせてしまった報いとして銭探しの罰が下されるが、おそらく西鶴の目的は、読者に「口は災いの元」という教訓を与えることだったのだろう。千葉孫九郎というのは潔癖な人物であり、青砥を騙した男を痛烈に批判するが、「正道を語る口」と位置付けられている。こういう重要な役割を果たしているため、名前も与えられたのであり、このエピソードの展開には欠かせない存在になっているといえよう。言い替えれば、西鶴のテーマは語るべきことと語るべきでないこと²にあり、語るべきでないことの例としては、青砥を騙した男の自慢話が挙げられている。一方、語るべきことというのは、最後に出てくるが（「裸川」では改作してある）、青砥が千葉孫九郎を推挙することを指しているのである。青砥は、正しい道を主張した男（千葉孫九郎）のことを知り、執権に伝えようと決める。これによって、千葉孫九郎は高い役職に取り立てられ、出世する可能性が生まれる。太宰の「裸川」では、千葉孫九郎の出世については原典と一致しているが、そうなのは青砥の発言のおかげではなく、しっかり親孝行をした報いとして語られている。「両親の手助けをして、あっぱれ孝子の誉れを得て、時頼公に召出され…」とあり、青砥が仲介のような役割を果たしたということ

² 木村小夜（太宰治「裸川」論『日本文学研究論文集』）

は一切書いていない。それはおそらく、太宰にとって青砥というのは、ポジティブなキャラクターではなく、むしろ卑小な人間性を表す人間であるため、彼の行為によっては何もめでたいことが起らず、結局マイナスな存在でしかなかったからだろう。青砥が「真面目な人」というのは、残酷さを含んだ表現であり、アイロニカルな響きも感じられる。

太宰が行った顕著な戯画化の具体的な例をもう一つ挙げよう。原作では浅田の行為の真相が結末でさりげなく暴かれるが、「裸川」では、青砥の8歳の娘が、父の計算の誤りを指摘し、事実を明らかにする。

アイロニーに溢れ、一見ただの気晴らしとして書かれたこの「裸川」には、実は、さらに深い意味が込められている。戦時下の日本政府を痛烈に批判しているのだ。先行研究によって指摘されているように、「裸川」は太宰のいわゆる“抵抗文学”となっている。小泉浩一郎氏の言葉を引用すると、「青砥の『真面目』は、大東亜共栄圏等の『真面目』な大義名分の懐疑と、盲目の絶対化という硬直した時代精神への批判を提出しようとしている」。つまり、日本国民に耐乏生活を強いる国家が主人の青砥に重ねられており、太宰の青砥への厳しい批判は、日本国家への批判となっている。また、青砥が唱道する「国のための質素儉約」には、「欲シガリマセン、勝ツマデハ」という当時日本政府が使っていたスローガンへの皮肉が透けて見える。太宰は、「この仕事も、書きはじめてからもう、ほとんど一箇年になる。その期間、日本においては、実にいろいろな事があった。私の一身上においても、いついかなる事が起るか予測出来ない。(略)私はこれを警戒警報の日にも書きつづけた」と書いており、太宰が戦事下にあつて危機感を抱いていたことが推測できる。したがって、自分がどうなるか分からないという状態に陥っていた太宰が、日本の読者に「日本の作家精神の伝統」を知らせる必要を感じ、それを作家としての義務とだけではなく、自分の人生におけるもっとも大切な使命と、誇りを持って考えたと言えよう。

当時は、王朝・天皇・国家へとつながる文学が小説家によって賛美され、評価されていたのだが、太宰は庶民の目を持つ井原西鶴を選び、彼なりの古典回帰をしていたのだ。西鶴を日本の古典の代表として選んだことで、日本国民が庶民的知恵、人間同志の信頼や心の交流を思い出すよう、刺激を与えようとしたのである。

太宰は、この「新釈諸国噺」を通して、まず日本人である自分自身の思考、信念を表すことで、自分と運命を共有する日本国民に、当時の国家の方針に反対しなければならないというメッセージを送ろうとしたと言えよう。

この『新釈諸国噺』は太宰治の作品の中で意外、奇抜と感じられるものだ。太宰の典型的なモチーフから離れており、太宰という作家のそれまで見たことのない顔が表れる。この作品集によって、読者は新しい視点で作家太宰を捉え直すことができる。

先に述べた通り、『新釈諸国噺』の執筆には特別な意図があり、また執筆に至るまで様々な事情があったのだが、『御伽草紙』に入っている作品は、太宰の作家活動の中期に属するものであり、戦争中に書かれたものばかりである。神話や伝承などが基になっているが、

それらに太宰が自分の想像や批判を自由に加えているのである。太宰はこの時期に、完全に新しいストーリーのものを書くより、むしろ既にある作品の中で想像を膨らませ、その話に出てくる人物の心理や感情などの解釈を好む傾向が著しい。『新釈諸国噺』はもちろん、『女の決闘』、『走れメロス』、『新ハムレット』などもよく知られたストーリーを下敷きにして書かれた作品である。『新釈諸国噺』の場合は、その時代を鋭く諷刺していた作者西鶴に意識を重ね、太宰も人間とはどういうものか、人間の愚かさ、悲しさについて考察し、現代的な見方を付け加えながら、自己表現しているのである。また、戦争により社会状況が悪化していく中で、多くの作家はインスピレーションが湧かず、創作活動を止めようとしていたが、太宰は才能を見せつける素晴らしい傑作をつぎつぎと発表しつづけている。文芸評論家の奥野健男の言葉を借りると、「太宰治の途絶えざる文学活動によって、日本文学の栄光ある伝統が、戦中から戦後に一筋つながり得たと言っても過言ではない。」太宰は、徐々に暗く沈んで行く日本に生きながら、あきらめることなく創作活動に全精力を注ぎ、最後まで“語りつづけた”。こういったところにこそ、作家太宰の希有な生き様が見られ、彼の個性、面白さがうかがえるだろう。

ただの“気晴らし”として読み始めた太宰治は、読めば読むほど面白くなり、最終的に日本語・日本文化研修プログラムの研究対象とするところまで来た。太宰治について書かれた評論や論文はもちろん数え切れないほどあるが、『新釈諸国噺』のような“二流作品”としか評価されていないものについては、研究がそれほど進んでおらず、手が付けられた段階にとどまっているとさえ言える。私自身、非常に多作で、素材も幅広い太宰治の小説作品をまだわずかしか読んでいないため、太宰についてもっと深く知りたいという気持ちがあり、これからもいろいろな作品をできるだけ読もうと思う。将来、また研究のテーマとできればと願っている。

参考文献：

- 佐藤隆之（太宰治『新釈諸国噺』）
- 小泉浩一郎（『新釈諸国噺』論 — 「大力」「裸川」「義理」をめぐり—）
- 山田晃（「西鶴と現代作家—治—」『解釈と鑑賞』昭和32・6）
- 木村小夜（太宰治「裸川」論 『日本文学研究論文集』）
- 寺西朋子（太宰治『新釈諸国噺』出典考）
- 木越治（「西鶴挑発するテキスト」至文堂 2005／3出版）
- 奥野健男（『御伽草紙』解説 新潮文庫 2009刷）